京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十六卷　第一號

大正十二年一月一日發行

新餘剩價値說及社會階級協和論　法學博士　田島錦治
租稅配分に於ける公益逆比の原則　法學博士　神戸正雄
個人と團體との關係　法學博士　財部靜治
サン・シモンの社會改造哲學と社會連帶思想　文學博士　米田庄太郎
マルクス的階級概念　文學博士　高田保馬
物價調節對米價調節問題　法學博士　戸田海市
資本論中或る一句の各種版本に於ける異同について　法學博士　河上肇
今後の植民政策の基準　法學博士　山本美越乃
農業勞働自治組合制　法學博士　河田嗣郎
營業稅改正論　法學博士　小川鄉太郎
物價問題の統計的研究　法學士　汐見三郎

サン、シモンの社會改造哲學及び社會連帶思想

米田庄太郎

(一)サン、シモンの社會學の概念及び彼の學說の一般的方針
(二)サン、シモンの思想史的歷史觀
(三)サン、シモンの經濟史的歷史觀
(四)サン、シモンの當代社會思想批判
(五)サン、シモンの社會主義の出發點
(六)サン、シモンの社會理想及び其の實現の政策的方針一般

さきに本雜誌上に公にせる拙稿「傳統派の社會連帶思想」の中に述べし如く、近代佛蘭西に於ける社會連帶思想の始源は、傳統派の社會哲學に於て求められねばならないので、そうして同派の社會思想の影響を受けて、先づ社會連帶思想を科學的に展開せんとしたのはオーギュスト、コントである。併しコントの社會哲學はサン、シモンの思想を承けて之を大成したもので、實にコントの社會哲學はサン、シモンの計畫を詳細に實現したものに過ぎないと、考へる人々さへあるのである。さればコントの社會哲學及び社會連帶思想を、歷史的に理解する爲めには、吾人は先づサン、シモンの社會哲學を研究して置かねばならぬ。更にサン、シモンの社會哲學も、直

接に傳統派の影響を受けて居るので、是れはサン、シモン自身も時々言明して居る事である。そうしてサン、シモンは特に社會連帶と云ふ語を使用して居ないが、併し實質的には彼も社會連帶思想を其の根本的一原理として立てゝ居たことは、少しく注意して彼の社會改造論の全體を通觀すれば直ちに覺られるのである。されば今近代佛蘭西に於ける社會連帶思想の始源及び發達を研究せんとするに當ては、吾人は傳統派の社會哲學に次で、先サヅン、シモンの社會哲學を研究するが、正當なる歷史的順序であると思ふ。

却說サン、シモン(Saint-Simon, 1760-1825)は本來天才的豫言者的な思想家にして、嘗て自分の思想の全體を論理的組織的に論述した事はない。隨ふて彼の思想の全體を組織的に把捉し理解することは、甚だ困難な仕事であるが、併し幸に今日までには、既に幾多の人々が彼の思想の組織的研究を企だてゝ居るから、余は此處に其等の人々の研究を參考して、彼の社會改造の哲學の大要を述べ、そうして特に社會學及び社會思想、殊に社會連帶思想の發達から見て、其の中に如何に重要なる思想が、含まれて居るかを指示したいと思ふ。

(一) サン、シモンの社會學の概念及び彼の學說の一般的方針

サン、シモンは普通に空想的社會主義者であつたと考へられて居るが、併し實質上彼は近世の科學的社會改造論の創設者とも見做す可き人にして、彼は實に眞の社會改造或は新しき社會の建設は、只社會の科學的研究によりてのみ成就し得られるものと考へたのである。此くて彼は社會改造論の基礎として、先づ社會を科學的に研究する一の新しき科學卽ち彼が實證的政治學とか、社會生理學とか、社會物理學とか稱せるもの、つまり今日社會學と稱せられるものを建設することが、第一の急務であると確信したのである。さればサン、シモンの社會改造論を研究せんとするに當て、吾人の先づ注目すべきは、彼の政治學或は社會學の概念である。

却說サン、シモンの考へる處によれば、彼の時代の社會的紊亂、社會的害惡の根本原因はつまり人々の精神を結合する共同的觀念或は共同的思想の、存在しないことである。されば共同的思想を確立することは、社會改造の根本義であるが、然るに共同的思想は哲學によりて樹立されるものである。而かも在來の諸哲學は、何れも此の任務を盡くすことが出來ない。彼等の時代は既に過ぎ去つた。そこで新しき哲學を立てることが必要である。「一切の社會組織は哲學體系の一應用である。されば豫め哲學の新體系を構成することなしに、社會の新組織を建設することは不可能である。」「社會は共同的道德觀念なくば存立するを得ず、而して道德觀念は、社會內に於て普遍的に承認されたる一の哲學說を基礎としなければ、共同的であり得ない。」「哲學說は社會

一切の部分を結び固める紐帶である」。然らばサン、シモンが新に建設せんとする哲學體系は、如何なるものであつたか。

サン、シモンの考へによれば、一定の時代の共同的思想となるものは、其の時代の何人も疑ふことが出來ずして、必ず承認しなければならぬものであるが、今日かゝる性質を有するものと云へば、夫れは只實證科學の眞理だけである。然るに物理科學は既に全く實證的となつて居るが、精神科學はまだそうでなくして、神學的或は形而上學的、想像的或は半想像的半實證的な狀態に停滯して居る。されば精神科學を、先づ完全に實證的なものとしなければならぬ。次に一切の實證科學を位階的に綜合して實證哲學の體系を建設せねばならぬ。而して此の實證哲學の建設により、此處に共同的思想が確立され、又之れに基いて社會改造が科學的に成就されるのである。尙ほ稍々詳しく云へば、サン、シモンは共同的思想を確立する爲めに、實證哲學の體系を建設せんとて、三つの仕事を企てたのである。一は一切の科學を分類することにして、二は一切の科學を悉く實證的となすこと、三は實證的政治學或は社會學を創設することによりて、他の一切の科學を統合し、之を以て科學の位階的體系の冠冕となし、科學の位階的體系を完成することである。而してサン、シモンは此の如き實證的政治學或は社會學を創設して、以て實際的政治術或は實證的政治體系の理論的基礎を確立し、之を運用して實際上社會の改造を圖らんとしたのであ

る。此處に右の三つの仕事に就て、サン、シモンの實際上遂成せしことを、詳しく述ぶる暇はないで、只彼の實證的政治學或は社會學の概念を略述するに止めて置く。

今サン、シモンは實證科學の本質を如何に解して居たかと云ふに、夫れはつまり其の對象とする現象が、人力の左右し得ない一定不變の自然法則に、支配されて居ることを認め、隨ふて觀察法によりて、之を研究することを意味するものと解したのである。要するにサン、シモンの考へによれば、實證科學とは觀察法を唯一の方法となし、之れによりて其の對象とする現象の自然法則を發見せんとするものである。されば實證的政治學或は社會學の成立し得るには、根本的には二つの條件が充たされねばならぬ。一は其の對象となる社會現象は、他の科學の對象とはなし得られない特別な現象部類にして、且つ自然法則に支配されるものであると云ふこと、二は夫れは觀察法によりて研究し得られると云ふことである。而してサン、シモンは此等二つの條件が、現實に充足されることができ、隨ふて實證的政治學は成立することが出來るので、否な夫れは是非成立しなければならないので、若し然らずば健實なる社會の改造は、全然不可能であるとさへ考へたのである。

サン、シモンの考へによれば、政治學は生理學の一種である。廣義の生理學は個人の發達及び種屬の發達を研究するものにして、夫れが特に個人の發達を研究する場合には、普通に單に生理

學と稱せられて居るが、嚴密に云へば夫れは個人生理學と稱せらる可きである。而して之に對して生理學が特に種屬の發達を研究する場合には、夫れは社會生理學と稱せらる可きであるが、夫れが卽ち政治學である。此くて社會生理學は、個人生理學から區別される特別な對象を有し、個人生理學の如く、解剖學や化學の助けに依て、個人の身體組織の內部に入り込み、機能及び機官を比較するのでなく、社會體の機關として個人を其の儘に考察し、社會體の有機的機能を研究するのである。蓋し社會は單に生物の集合に過ぎないものでなく、眞實なる組織されたる器械にして其の一切の部分は夫れ夫れ異なれる仕方にて、全體の進行に貢献するからである。人間の集結は實に一の眞實なる實在物であるのである。

右に述べし如く、政治學は特別なる對象を有するものとするも、其の對象は又實證的なもの、卽ち法則に從ふものであるか。眞なる哲學的精神は、一切の現象を例外なく、普遍的決定主義に、或は一定の法則に從はせるものである。而して天文的、物理的及び化學的現象が總て普遍的引力の法則に從ふことは、今日一般に認められて居るのであるが、吾人は此の法則を更に生理的現象殊に社會生理的現象にも擴張せねばならないのである。實際に於て、社會有機體は自然の外に在るのでなくして、社會的發達は動物的發達の一延長に外ならぬ。宇宙間には只物理的秩序があるだけである。此くて一切の現象、隨ふて社會現象も、單一なる引力の法則に從ふものとすれば、

政治學も他の科學と同等の資格にて、實證的となるのである。

然るに今社會的事實は、必然的法則に從ふものとすれば、之を研究する爲めには、他の科學と同じ方法、卽ち觀察法を適用せねばならぬことは明白である。觀察法は實證科學特有の方法にして、如何なる現象も、其の研究が實證的となり得る爲めには、觀察法を適用されねばならぬ。而して政治學が觀察法を適用する實證科學となる時に、科學の體系は完成され、形而上學及び宗教に取り代はる可き一般的實證哲學が確立され、此處に統一への人間精神の自然的傾向が完全に滿足されるであらう。

併し今吾人が觀察法を社會現象に適用する時には、如何に之を運用す可きか。

サン、シモンはコンドルセーに倣ふて、一切の社會的事實を進步或は社會的進化の見地から考察し、各時代に就て之を代表する或一國民を見定め、而して其時代に成就されたる一切の進步を、之れに結び附けて考へた。是れサン、シモンの見る處によれば、此の抽象的見方は啻に進步を著しく表示する爲めに有益であるのみならず、更に正當であるからである。其の正當であると云ふはつまり人間精神の進行は一にして不變、而して時と處によりて變ずるものでないからである。一切の國民は同一の潮流に從ふて進むものにして、彼等は只各々其の進化の程度を異にするだけである。然らば此の潮流或は進步とは如何なるものであるか。

進歩は一切の社會を驅りて、其の狀態を絶へず改良し、吾人の後ではなく、吾人の前にある黄金時代に、吾人を日々近づかしめる處の、一の普遍的必然的な衝動である。夫れは人間及び人事を誘導し支配する法則にして、人間其物は只其の道具に外ならぬ。進歩の力は吾人から生ずるが、しかも吾人は進歩の支配から脱することが出來ず、又其の作用を左右することが出來ない。進化は無意識的器械的である。偉人天才と云ふも只進化を意識し、總括するに過ぎない。然るに進歩の一切の時期は必然的であつたとすると、夫れは有り得たりし總てゞあつたので、吾人は之を賞めることも、亦非難することも出來ない。吾人は只公平に觀察す可きである。而して現在を理解し、將來を照明す可く吾人を助けるものは、此の公平に觀察されたる過去である。歴史は吾人を指導するもの、夫れは政治家に缺く可からざる案内者である。要するに政治學は進歩の法則を見出し、人間社會は何處より來るかを探り、又夫れが必然的に向ふ目的を見出すことを任務とするものであるが、其の任務を盡くす爲めには、政治學は現在を觀察し、過去卽ち歴史によりて現在を照明せねばならないのである。

サン、シモは右に述べし如く、社會學の研究に於て、大に歴史を重んじ、政治學或は社會學の眞の方法、或は社會學に於て運用される觀察法は、歴史的方法であると考へたのである。而して實際上彼の立てた理論は、總て歴史から引出されて居るのである。然らば彼は眞の歴史的方法を如何なる

ものと考へたかと云ふに、彼の論ずる處によれば、第一に歴史は哲學的精神に於て考へられねばならぬ。事實は先づ精確に叙述されたる後、一の理論によりて相互に結び附けられ、必然的關係によりて相連結さる可きである。此くて事實は文明の進歩の圖表を作るであらう。歴史とはつまり進歩の歴史であるであらう。第二に歴史は普遍的である可きもので、夫れは各國民の上に立ち、一切の國民を抱有す可きである。是れ一切の國民は、必然的發達の同一の法則に從ふからである。此くて歴史家は王朝（ダナスチー）を看過し、大量的（ペール、マッセ）に、或は時代によりて、事實を分ち、而して各時代は前時代の必然的連續であることを示すであらう。蓋し進歩の一切の階段は、宿命的に連結されて居るからである。

歴史は右に述べしが如くに改造されて、此處に始めて政治學の讃嘆す可き道具或は方法となり、而して之れによりて政治學は觀察科學の資格を獲得し、實證的理論を立て、社會の改造を指導することが出來るのである。

却説サン、シモンは彼の社會改造論の理論的基礎として、新に建設せんとする實證的政治學或は社會學の目的、對象及び方法を、以上述べしが如くに決定したのであるが、然るに彼の性格と彼の思惟の非組織的傾向とは、彼をして社會學の體系を大成するに至らしめなかつた。而して之を遂成したるは彼の門下生の一人にして、後彼を離れたオーギュスト、コントであつたので、かくてコントは社會學の創設者とも見做さるゝに至つたのである。併しコントの建設した社會學の根本

原理は、粗雜ながら既にサン、シモンによりて說かれて居たので、夫れは上にサン、シモンの社會學の概念に就て述べし處によりても、略々察知されるのであるが、尙ほ簡單にサン、シモンの實證的政治學或は社會學の根本思想を述べて置うと思ふ。然るに今之を述べんとするに當つて、余輩はサン、シモンの思想には、コントの思想と異なれる重要なる一方面のあることが發見される。夫れは社會進化、人類進步の根本的因素として、經濟を大に重要視することである。サン、シモンは其の方面に於ては、經濟史的歷史觀或は所謂唯物史觀を既に說いて居たので、此の歷史觀の創設者と云はれるカール、マルクスは、假令或人々の考へる如く、サン、シモンの說を祖述し、大成したものに過ぎないのではないとしても、少なくもサン、シモンの思想の影響を、大に受けて居たことは明らかである。要するにサン、シモンの思想には、觀念史的或は思想史的歷史觀、所謂唯心史觀の方面、卽ち觀念は思想の發達を人類の進步、社會の進步の原動力及び中核と見る方針と、經濟史的歷史觀、所謂唯物史觀の方面、卽ち經濟の發達を人類の進步、社會の進化の原動力及び中核と見る方針との二方面が混在して居たので、而して吾人は其の思想史的歷史觀の方針はコントによりて組織的に展開され、大成され、又經濟史的歷史觀の方針はマルクスによりて組織的に展開され、大成されたと見做すことが出來るのである。然らばサン、シモンにありては、右の二方針は如何に相關係して居たかと云ふに、彼自身は嘗て此の關係を論じたことがないから、

此處に簡單明白に之を論定することが出來ず、又此處に此の問題を詳しく論究することが出來ないが、彼の主要著作の年代順を追ふて考へると、大體上左の如く云ふことが出來ようかと思ふ。即ち彼は始めは思想史的方針を立て、主として其の方針に於て考究し、思索して居たが、後ブールボン王朝復興時代に至つて、當時の社會狀態に就て特に經濟の方面に注意し、而して經濟的因素の重要を認めて經濟史的方針を立て、主として同方針に於て考究し、思索して來たが、併し始めの思想史的方針は矢張り固持して居た。而して死去する前には、再び始めの思想史的方針を大に强調したのであるが、併し両方針の關係に就ては只漠然たる考へを抱いて居たゞけて、別に之を明らかに決定しようとはしなかつた。是れは確かに彼の學說の重大なる一缺點であるが、しかも彼の性格や彼の思惟の非組織的性質から考へると、別に怪むに足らぬことかと思はれる。

是より先づ簡單にサン、シモンの右の二方針の大要を述べて彼の社會改造論の理論的根本思想を究明し、夫れより進んで彼の社會改造論の理想的實際方面を考究し、以て彼の社會思想に於ける社會連帶思想の實質的意義を示したいと思ふ。

（二）サン、シモンの思想史的歷史觀

サン、シモンはさきに述べし如く、政治學或は社會學の根本問題は、觀念或は思想の進步の法

則を發見することに在ると考へたのであるが、今彼は此の法則として三時代の法則を說いたのである。彼は先づ科學の歷史を考究して、總て科學は想像的或は神學的であることから始まりて、半想像的及び半實證的卽ち形而上學的となり、而して最後に實證的となることを發見し、此くて科學の進步は總て此の三時代を追ふて行なはれるものと論斷した。夫れより彼は哲學も亦同樣に三時代を追ふて進步せねばならぬと考へた。蓋し彼は哲學は全體、科學は部分或は要素にして、部分或は要素たる科學が、想像的神學的である以上は、其の全體たる哲學も亦然らざるを得ず、又科學の一部分は實證的となつて居るが、他の部分は尙ほ想像的に止まつて居る以上は、哲學も矢張り半想像的半實證的、卽ち形而上學であらざるを得ず、而して科學が全く實證的となる時には、哲學も亦全然實證的となるであらうと考へたからである。

サン、シモンは更に右の三時代は必然的に相連續するものと考へたので、彼の論ずる處によれば、人間が言語を作るに至れる時から、眞に動物よりも勝れたるものとなり、而して其の時から、想像的或は宗敎的體系が生れた。偶像崇拜は其の最初の形態である。此の時代には人間は一切の事物の原因は、可視的であると信じ、而して之を崇拜した。次に人間は可視的原因の觀念から、不可視的な生きた多數原因の觀念に進んだが、是れ卽ち多神敎である。夫より人間は更に不可視的な生きた一原因の觀念に進んだが、かくて一神敎が起つて來た。而して此處に又轉移時代が始

まつて來た。是れ半想像的半實證的時代にして、此時代に於て人間は唯一の不可視的な生きた原因の觀念から、現象の諸部類（まだ總ての部類ではないが）を支配する多數法則の觀念に進んでくる。而して最後に人間は現象の總ての部類を支配する多數法則の概念から、物理的現象も亦精神的現象も、一切の現象を包括する處の宇宙全體を支配する唯一の法則、卽ち引力の法則の信仰に必然的に進まねばならないが、サン、シモンは此の最後の時代は、彼れによりて開始されたと考へたのである。尙ほサン、シモンは彼が半想像的半實證的時代、又は單に形而上學的時代と稱する中間時代の必然性を特に論述して居るが、彼の考へによれば、靈界或は精神界にありて、人間の思想を宗教から科學へ移らしめるものは、形而上學である。形而上學者は宗教の破壞者、隨ふて科學の先行者である。形而上學の破壞作用は、宗教から科學へ移る爲めに、絕對的に必要缺く可からざるものである。

サン、シモンが、人類進步の根本法則と認めたる、思想進步の三時代の法則とは、右に述べしが如きものであるが、然らば彼は此の根本法則に基いて如何に人類の進步、社會の進化を說明したかと云ふに、要するに思想の神學的或は想像的時代に於ては、之れに基いて封建的武力的社會體系が成立し、而して思想が科學的實證的時代に達すると、又之れに應じて產業的平和的社會體系が確立するのである。尙ほ思想の進步に於て、神學的時代と科學的時代との中間に、前者を破

壞して後者を準備する過渡時代として、形而上學的時代が必然的であると同じく、社會の進化に於ても、封建的武力的體系と産業的平和的體系との中間に、前者を破壞して後者を準備する過渡期としての形而上學的時代に對應する一定の時代が、必然的に介在せねばならぬ。而して思想の進化に於ける形而上學者の破壞的任務に準じて、社會の進化に於て同一の任務を成就するものは法律家である。サン、シモンは此の如く、人類の進步全體に於ける形而上學者及び法律家の任務を、本來破壞的準備的のものと見たのである。さればサン、シモンの考へによれば、人類の進步全體は、必然的に先づ神學的封建的武力的時代より始まり、次に必然的に形而上學的革命的時代を通過して、最後に必然的に科學的、或は實證的、産業的、平和的時代に到達するので、是れ人類進步の必然的傾向或は法則である。而して社會學或は實證的政治學が、此の必然的法則を究明することによりて、此處に之れに基づいて實證的政治體系が確立せられ、吾人は實證的物理科學の法則を應用して、人類の幸運增進の爲めに益々有効に自然を利用する如く、又社會の進步を促がすことが出來るのである。如何なる偉人、天才も、勝手氣儘に社會組織を改變し、或は創造することが出來ない。彼等も只社會進化の自然的必然的法則をよく理解することによりて、社會の進化を促がし得るだけである。但しサン、シモンの右の社會進化思想は、只おはまかに、散漫に、粗雜に論述されて居るだけで、之を始めて組織的論理的に充分展開したのはコントであり、又コ

ントによりて該思想は、近世社會學の發達に重大なる影響を及ぼしたのであるが、しかも吾人は其の創設の功を、サン、シモンに認めねばならぬ。

サン、シモンは又人類の歷史に批評的時代と有機的或は組織的時代（les périodes critiques et les périodes organiques）とを區別し、而して人類は有機的時代に於ては一の社會類型を構成し、批評的時代に於ては之を破壞し、更に新しき有機的時代に於て又新しき社會類型を構成し、此くて両時代は無限に交代するものと考へた。尙ほ彼はコントとの合著「近代的過古全體の概評」（Sommaire appréciation de l'ensemble du passe moderne .1820）に於ては、近代的過古に於ける批評的運動と有機的或は組織的運動との消長を論じて居る。サン、シモン（コントと共に）の考へる處では、舊社會體系は宗敎と武力的封建制との、二大社會的勢力によりて建設されたるものであるが、夫れが全盛を極めし時代に、既に右の二大社會的勢力に對抗し、新社會體系の基礎となる可き二大社會的勢力が、段々發達して來た。それは科學と產業とである。此くて第十一世紀以後の歷史は、反對の方向に進みながら相並行する事件の二大系列に、大別される。第一の系列は舊社會體系の頽廢、宗敎と封建制との漸次的衰退、卽ち批評的運動の發達にして、第二の系列は新社會體系の進步、科學と產業との漸進的發達、實證的科學者と產業的勞働者との增長的擴大及び優勢、卽ち有機的運動の發達である。此くて宗敎及び封建制の衰退に對して、科學及び產業が益々發達し、而

して宗教及び封建制が全く廢滅して、舊社會體系が瓦壞し、科學及び產業が大に隆興して、新社會體系が確立し來ると云ふのが、卽ち近世史的發達の大勢である。されば現代の社會を改造するには、只今日までに發達し來れる歷史的運動を繼續すればよいのである。つまり今日尙ほ舊社會的勢力の保有する僅かな殘餘の力をも、全く夫れから奪ひ去り、科學者及び產業者をして、必然的に彼等の手に歸す可き心靈的或は精神的及び世俗的或は政治的權力の全體を、保有せしめねばならぬ。改造された社會、或は更生せる社會とは、つまり產業的な、科學的な、そうして本來平和的な社會である可きである。かゝる社會體系は必然的に過去から導かれ、而して適切に現在の要求に應ずるものである。故に夫れは決して一のユートピアではなくして、實に一の嚴肅なる事實であるのである。

サン、シモンの思想史的歷史觀の方針に從ふて、彼の社會進步論の大要を概說すれば、夫れは以上述べしが如きものであると思ふが、次に余は彼の經濟史的歷史觀或は所謂唯物史觀の方針に從ふて、彼の社會進步論の大要を概說して見ようと思ふ。

(三)サン、シモンの經濟史的歷史觀

今サン、シモンの著作中にて、彼が特に產業組織問題を重要視して論究して居るものは、ブー

ルボン王朝復興時代に於ける彼の晩年の著作である。そうして之れによりて吾人は、先づ彼が特に經濟問題、產業問題に注目して來たのは、ブールボン王朝復興時代に於てゞあることを察知するのである。されば此の時代に於ける佛國民の社會的經濟狀態を考察することは、彼が何故に產業組織問題を特に重要視して來たかを理解する爲めに、甚だ有益であると考へる。併し此處に當代の社會的經濟的狀態を詳しく說述する餘白はないから、只簡單に之を約述するに止める。

夫れブールボン王朝復興時代にありては、一方に於ては近代的工業は急速に勃興して來たが、他方に於ては封建的精神に滲潤されたる支配階級が、ナポレオン沒落後市民的社會組織の無能を確信して、封建制度を復活せしめんと大に努力して來た。而して之れに對して自由主義者は又革命の遺產を保持する爲めに奪闘し、政權の獲得に全力を注いで居た。併し無產者は如何なる狀態にあつたかと云ふに、彼等は尙ほ無智無敎育にして、階級意識はまだ彼等の間に發達せず、而して彼等は資本主義的精神の專橫に對しては、已れを防衞する何等の手段を有しなかつた。又彼等は政治上に興味を有する以上は、只自由主義に隨從するか、又はオレルアン家や、ボナパールト家の復興を陰謀する秘密結社に加入して、以てより善き時代に對する彼等の憧憬を充たさんとして居たゞけである。此くて無產者は甚だ無智無力にして、而して彼等の生活狀態は實に困窮を極めて居たのである。

サン、シモンはかゝる社會的經濟狀態を目前に視て、夫れから强き印象を受け、社會進步に於ける經濟的因素の特別なる重要を痛切に感じたのである。そうして一時は彼の思想史的歷史觀を、全く忘れたかと思はれるほど、社會進步に於ける經濟的因素を强調して來たのである。

サン、シモンは大革命以來、佛國に於て二十五六年間に、憲法は十回も改定せられた、或は十種の憲法が發布されたが、しかも夫れによりて社會的生活狀態は何等の根本的改變をもなして居ないことに注目し、此處に彼は國家と社會との間に本質的差別の存する事を覺つた。而して彼は政治的構成は決して社會組織の基礎ではなく、只一の第二次的構成物に過ぎないことを確信するに至つた。然らば彼は何を以て社會組織の基礎と考へて來たかと云ふに、夫れは財產法である。

サン、シモンは此の問題に就て左の如く述べて居る。

「吾人は政治形體をあまりに重要視し過ぎて居る。……權能及び政治形體を規定する法律は、財產權及び其の行使を規定する法律ほど、重要なものでなく、又國民の幸福にさほど重大な影響を及ぼすものでない。……議會政治の形體は只一の形式に過ぎないものにして、而して財產は中核である。此くて眞に社會組織の基礎或は地盤を造るものは財產の確立である。」

「財產權を構成する法律は總ての中で最とも重要なるものにして、社會的建築物の基礎とな

るものは夫れである。」

「財産權及び之を尊重せしめる規定の確立は、社會に與へ得られる唯一の基礎であることは、疑はれない。」

「富は總ての政治的勢力及び價値の眞實唯一の根柢である。」「自由は財産に基くものである。」

「財産は又教育と結合すれば、政府に持續性を與へるのである。」

今サン、シモンは右に述べし如く、財産或は財産權を社會組織の根本的基礎として重要視して來たから、此處に彼が社會改造の理論的基礎を確立する爲めに建設せんとする新政治學は、又財産の科學として考へられねばならなくなると思ふが、然るに彼は之を生産の科學或は産業の科學として考へて居る。そうして彼は又産業の進歩は最も根本的なものにして、産業は人間社會の存立の唯一の保證、富と幸福との唯一の源泉であると云ひ、更に産業的觀念は社會を保持する紐帶にして國民とは産業的社會に外ならぬと考へ、「最後の分析に於て、社會の一切の眞實なる勢力の存立するのは産業に於てである」と云ふて居る。要するにサン、シモンは財産と生産或は産業との關係に就ては確定せる思想を抱いて居なかつたので、時としては財産の形成は生産或は産業に依存するが如く、又時として之れに反して、生産或は産業は財産の形成に依存するが如くに考へて居たのである。而してサン、シモンは右の見解に基いて、歴史或は社會進化の一新學説を立てたの

である。卽ち財産及び生産或は産業の變動に基いて、階級の形成を發生的に研究し、歷史を以て階級鬪爭の發達と見る新學說を唱へたのである。但しサン、シモンは右の考察を唯佛蘭西の歷史に就て行なふたゞけで、又其の考察は尙ほ甚だ粗雜であるが、しかも彼は階級鬪爭の發達として、歷史を考察せる最初の近世思想家にして、カール、マールクスの階級鬪爭史論も、つまりはサン、シモンの說を修正し開展したものに外ならないと思はれるのである。此處にサン、シモンが佛蘭西に於ける階級の形成及び鬪爭に就て論究した事の大要を述べて、以て彼の經濟史的歷史觀の一班を示して置きたいと思ふ。

今サン、シモンによれば、フランク人がゴールアに移住したる後、支配者たるフランク人と奴隷なるゴールア人との二階級が成立した。ゴールア人は支配者の爲めに土地を耕作し、又總ての種類の手工業に從事した。そうして彼等は舊羅馬の奴隷の如く、段々に小額の貨幣財産を蓄へ、之を注意深く隱匿した。然るに十字軍戰爭、殊に其の結果として生ぜる奢侈生活は、フランク民族の君主をして、强く貨幣の必要を感ぜしめ、夫れよりして彼等は彼等の奴隷に自由或は特許權を賣らねばならなくなつた。尙は奢侈生活は夫れが需要を充たす爲めに働く商人及び手工者の社會的地位を高めた。そうしてフランク人の酋長たるよりは、ゴールア人に愛される王たらんと欲せしルイ第十一世は、フランク人の諸侯伯を彼の主權に屈服させる爲めに、コムミユンス卽ち都

市及び田舍に於ける總ての勞働的ゴールア人と結托した。國王は諸侯伯より彼等の政治的權力を奪ひ、又彼等が都市に住み込むに至りて、彼等は國家内に於ける總ての獨立な意義を失ない、而してルイ第十四世の下にありては、遂に國王の從臣となつた。尙は此の國王の時代に、生産物の交換が益々增長することにより、一の新しき階級卽ち銀行家の階級が起つた。併しコムミユンヌから特權者の地位に上れる人々の全體は、舊貴族に無視されて居ることを感じた。此くて貴族ではない法律家、市民出の軍人、自から指揮經營し、或は勞働する生産者ではない處の有産者、一言に云へばブールヂョアが千七百八十九年の革命を起したので、其の眞の目的は産業體系或は産業組織（Système industriel）の建設である。而して其の革命はまだ終つて居ないので、夫れは只産業者卽ち國民の働く部分が、國家の行政權を握つた時に、始めて完成するであらう。此の目標に進む第一歩を示すものは、千八百十七年の公債にして、夫れは最早第十八世紀流の野蠻的仕方で募集されずして、相互に同等として他を承認する両者、卽ち政府と重要なる銀行家の階級との好意的商議によりて、起されたのである。

サン、シモンの經濟的歷史觀と稱す可きものは、右に述べし處によりて、察せられる如く、只佛蘭西の歷史に就て、粗雜な考察を加へたに過ぎないが、しかも階級形成及び階級鬪爭の歷史によりて、政治的變動を說明せんとするものにして、所謂唯物史觀なるものの見地を、始めて說述

したものとして、大に注意す可き價値があるのである。

却説余は以上の三節に於て、サン、シモンの社會哲學の理論的基本思想を大體上究明したと思ふが、是れより更に彼が其等の基本思想を實際に適用して、彼の時代の社會思想に加へた批判、卽ち彼の當代社會思想批判、幷に彼が改造さる可き將來の社會に就て抱ける理想、卽ち彼の社會理想及び之を實現する爲めに彼の立てたる政策的方針の一般を、簡單に說述して以て彼の社會思想全體に於ける社會連帶思想の意義を、明らかにしたいと思ふ。

(四) サン、シモンの當代社會思想批判

今ブールボン王朝復興時代の佛國の政治的社會的生活に於ては、相爭ふ有力なる二大社會的政治的思潮があつた。其の一は復活せる舊封建主義及びカトリック敎主義にして、其の二は「革命」の思想を傳承する自由主義である。然らばサン、シモンは先づ此等の二大思潮に對して、如何なる態度をとつて居たかと云ふに、封建主義及びカトリック敎主義の復活に對しては彼は左の如くに考へて居た。

夫れ「革命」は只既に痲痺せる社會的構成物を破壞するに止まり、確乎たる基礎に立てる何等の新しき制度をも建設しなかつたが故に、古い無力な封建主義及びカトリック敎主義が復活す

ることが出來たのである。而して此の中世紀的な社會的關係を復興させようとする傾向は、確かに總ての方面に於て破壞された社會的生活關係を、再び組織し編制せんとする切なる要求に應ずるものである。併し社會の發達を後戻し、其の大勢に逆行して、不完全なる社會組織を持續的に復活させ、再び革命前の狀態に於て社會組織を確立せんとするは不可能である。産業が根本的に封建主義を破壞せるが如く、科學は根本的にカトリック教主義の活力を根絶させた。されば特異な事情に因りて、中世紀的文化力が一時復活することがあつても、益々前進する新しき二大文化力即ち産業と科學とは、遠からず中世紀的文化力を全然驅逐するであらう。

右に述べし如く、サン、シモンは封建主義及びカトリック教主義の復活は、只特定の事情に因りて起れるほんの一時的現象に過ぎないと考へたのである。然らば彼は自由主義に就ては如何に考へたか。彼の考への大要は左の如くである。

夫れ自由主義の世界史的使命は、先づ中世紀的勢力即ち封建主義及びカトリック教主義の拘束から、人格を解放することであつた。而して自由主義は今や此の任務を完全に成就した。併し舊社會を破壞する社會的諸勢力を、調和的に發展する生活共同體に結合する一の社會的組織の創造は、自由主義が其の本來の性質上遂成し得ざる仕事である。此くて自由主義が勝利を視する今日の社會に於ては、何處に於ても尙ほ破壞の精神が支配し、文學に於ても哲學に於ても、

吾人は只破壞の精神の活動を見るだけである。而して利己心は至る處に全勢力を振ひ、社會は總ての統一的な、秩序を產出する生命原理を缺いて、只混沌たる狀態を呈するだけである。併し是れは自由主義が勢力を振ふ當然の結果である。尙ほ自由主義の中堅たるブールヂョア階級は、只封建主義黨の政治的勢力を破壞して、自から政權を掌握し、又勞働者階級を新たに己れに服從せしめることのみを目的として居る。ブールヂョア階級の目的とする處は、つまり封建的勢力を壓倒して、自から政權を握り、勞働者階級を壓迫して、自己の利益の爲めに彼等を使役するに在るのである。

サン、シモンは以上述べし如く、封建主義及びカトリック主義の復興は、社會進化の大勢に逆行するものにして、只ほんの一時的な現象に過ぎないものと考へ、又自由主義は中世紀的勢力から人格を解放すると云ふ重大なる使命を有し、又其の使命を今や完全に遂成したが、併し新しき文化力を調和的に結合して、社會を根本的に改造し、確乎たる社會組織を建設して、更生せる社會を創造する力を、本來有しないものであると考へたのである。此くて彼は自由主義の世界史的効績を十分に承認すると同時に其の缺陷をも深刻に摘發して、當代の社會的紊亂の責を之れに歸し、又封建主義及びカトリック主義の復興運動に於て現はれる處の、確乎たる社會組織を建設せんとする要求の正當なるを認めると同時に、其等の主義に從ふて新に社會組織を確立せんとする

は、社會進化の大勢に逆行するものにして、到底成就され難き企圖であることを痛論したのである。然らば彼は如何にして、自由主義の發達も、亦封建主義及びカトリック主義の復活運動も、其の性質上本來成就し難き社會の根本的改造、確乎たる更生社會の建設を成就せんとしたか。サン、シモンは彼の新たに立てた一主義即ち後に彼の社會主義と稱せられるものによりて、之を企だてたのである。

（五）サン、シモンの社會主義の出發點

今サン、シモンの社會主義は近世社會主義史の初代に於ける他の社會主義說に比して、一の特色を示して居る。夫れは只理性の立場のみから社會の改造を企だて、而して徒に巧妙なる空想を說くものでなく、さきに述べしが如く、彼の實證哲學或は社會學の立場からして、近世社會の現實なる歷史的發達を基礎とし、其の發達の大勢に基いて社會を改造し、更生せる社會を確立せんとすることである。而して彼の圓熟せる社會改造論に於ては、更生せる社會の確乎たる基礎となる可きものは、先づ產業であると考へられて居る。要するに彼は彼の云ふ處の產業組織或は產業體系を以て、更生せる社會の基礎となさんとするのである。されば此處に彼の社會主義の基礎的一思想として先づ彼の產業の概念を究明することが肝要であると思ふ。

サン、シモンの産業の概念は、其の廣義に於ては甚だ包括的なものにして、其の中には工業、商業及び農業を含むのみならず、更に科學及び藝術をも含んで居る。夫れはつまり社會的に有用なる仕事或は勞働の全體を包括するものと認めらる可きである。サン、シモン自身の言葉によれば、「産業は其の最廣義に於ては、有用なる勞働の總ての種類を包括するものにして、理論の應用と同じく理論其物も、又手の勞働と同じく精神の勞働をも含むものである」。此くて彼は學者は「理論の産業者」にして、直接の生産者は「應用の學者」であると云ふて居る。サン、シモンが此の如く廣義の産業の概念中に、科學をも含ませて居るのは、一見すれば奇異に感ぜられるが、併し近世産業殊に工業の發達と科學との間に、甚だ密接な或は不可離的な關係の存することを考へると、彼の見解は寧ろ彼の卓見を示すものとも云ひ得られるのである。尙ほ此處に注意す可きは、サン、シモンが新文化力、卽ち産業の運載者、つまり産業者と認めるものゝ中には、勞働者をも含ませて居ることである。彼の考へによれば、産業の運載者或は産業者と云へば、夫れは只生産を指導する企業家幷に國民の精神的指導者たる學者及び藝術家を含むだけでなく、文化の進歩の爲めに創造する國民の最大部分は、寧ろ「教育の程度の最とも低い、又最とも貧困なる人々」に於て成立するので、其等の人々は只從屬的なる仕事をなすに止まるが、しかも社會的價値に於ては他と同等の地位を有するものである。

サン、シモンは産業の概念を、其の最廣義に於ては右に述べしが如くに解したが、併し彼が普通に用ひて居る狹義に於ては、産業と云へばつまり資本主義的基礎の上に立てる、大工業を意味して居るのである。而して彼は近世國民は大なる産業社會を形成するものと考へ、右に述べし狹義の産業が、社會的諸勢力の源泉として、一切の生活表現を、如何に益々高まる度合に於て貫通するかを示す事に大に力を注いで居る。彼の考へる處によれば、近世産業に本有的な分業の大發達は、現代の社會的關係をして前代未曾有の一特質を發現させて居るので、以前にありては人々は個人的に相互に依存する事大なりしが、今日では此の個人結合は大に緩み、個人は主としして集團に依存して居る。又今日最とも進歩せる諸國民にありては、彼等の政治的關係の類似は、彼等の經濟的發達の類似に依て産出されて居る。而して其等の諸國民に於て、社會的秩序の學理となつて居るものは、市民的自由と産業とであるが、併し自由の欲求は産業の發達に伴なふて始めて勃興するので、又只産業の發達に伴ふてのみ自由は普及し、確立し得るのである。更に今や國際的競爭も、益々經濟的方面に於て展開する傾向が現はれて居るので、「國民間の競爭は、最早本質的には軍事的でなく、主として産業的である。」此くてサン、シモンは、社會經濟と實證科學とが國民的幸福の本源であるので、封建主義及びカトリック主義は、其の優勢なる地位から、永久に驅逐されねばならぬと考へた。要するにサン、シモンは、今や總てのものが産業に依存して來

たので、戰爭其の物も産業に依賴せずば、遂行され得なくなつて居ると考へた。尙ほ彼は廣義の産業者は、一國の人口の二十五分の二十四以上を占め、而して一國民の一切の身體的、精神的及び道德的力は彼等に基因するものなるを思へば、産業者の利害は國民一般の利害にして、又彼等は社會的及び政治的に最とも尊重さる可きものなるは、明白であると論じて居る。

今サン、シモンは現代の文化力としての産業の意義、隨ふて産業者の社會的重要を、右に述べしが如くに考へたのであるが、然るに彼の時代に於ては産業者は其の社會的重要に應ずるだけの政治的權力を認められて居なかつた。そうしてサン、シモンは是を以て實に人類史に於ける一大背理であると考へた。國民の一切の生活力の淵源たる階級が、只歷史的遺物に過ぎない少數の貴族の、利己的目的のみを追及する政府によりて、政治上全く支配されて居ると云ふのは、背理の甚大なるものである。無智な迷信的な懶惰な奢侈な寄生虫的階級が、有能な勤勉な有用な階級を支配して居ると云ふは、實に世界の顚倒である。此くてサン、シモンは産業者、生産者を覺醒させ彼等をして彼等の社會的文化的重要に應ずる政治的勢力を獲得せしめる爲めに、大に奮鬪したのである。

併し此處に注意す可き興味ある一事實がある。夫れは彼は始めには産業者の概念中に、さきに述べし如く、企業家、資本家と共に勞働者をも含ませ、而して兩者の利益は、産業者全體の利益

として一致するものと考へて居たが、後には殊に英國に於ける狀態に鑑みて、両者の利益の衝突すること、両者の利益の一致し難きことを覺つて來たと云ふことである。彼は始めは勞働者の利益を絞取するものは、只封建的反動階級のみであると考へて居たのであるが、併し後には企業家も亦其の飽く處なき貪慾と、彼等の占むる經濟的優位とによりて、大に勞働者の利益を絞取する傾向を有するものなるを覺つた。而して彼は遂に勞働者階級の利益の立場からして、社會の改造を企圖するに至つたのである。此くして彼の社會改造論は廣義の社會主義的なものとなつたので、要するに彼の社會主義的社會改造論は、彼の實證哲學及び社會學を最とも根本的な基礎となし、而して近代社會の發達に於ける產業及び產業者の根本的重要の思想、幷に產業者間に於て特に勞働者階級の利益を重要視する思想を、直接の出發點として構想されたものであるのである。

（六）サン、シモンの社會理想及び其の實現の政策的方針一般

却説サン、シモンは將來の社會、更生せる社會は如何にある可きものと考へ、又之を實現する爲めには、如何なる政策的方針をとる可きものと考へたか、卽ち彼の社會理想及び其の實現の一般的方針は、如何なるものであつたかと云ふに、是れも簡單明白に答へるには甚だ困難な問題であ

るが、矢張り諸家の研究を參照し、彼の著作を校合して、出來るだけ簡明に說述して見ようと思ふ。而して之れが爲めには自由主義の根本的二原理、卽ち自由の思想と財產の思想に對する、サン、シモンの批判から考究し始めるのが便宜であると思ふ。

サン、シモンの論ずる處によれば、當時自由主義の主張するが如き個人的自由は、形而上學の一產物、抽象的なる一思想物に外ならない。もつとも此の自由の觀念も、神學的及び封建的體系が、新文化力たる產業及び科學の發達を妨害して居た時代には、該體系を破壞して新文化力の發達を助長する爲めに必要であつた。併し今日では最早此の自由觀念を主張する必要がないのみならず、今日の社會的紊亂は實に此の自由觀念に基因する處大なるものである。されば今日の急務は此の自由觀念を排斥して、眞實な自由觀念、卽ち社會的自由の觀念を確立す可きであるのである。自由は本來社會的幸福を齎らす一手段に外ならぬもので、決して夫れ自身目的である可きものでないのである。

個人的自由は決して人間の共存の目的であり得ない。夫れは文明の結果にして、文明と共に進步するが、併し決して文明の目的ではないのである。人間は個人的に自由である爲めに相團結するのであるか。決してそうでない。野蠻人に就て見るも、彼等は狩りする爲め、戰爭する爲めに團結するが、併し個人的自由を得る爲めに團結するのでない。蓋し若し個人的自由を得んとする

ならば彼等は團結するよりは、孤立して居る方が一層よいのであるからである。一定の作業目的が、常に社會的行動の指導者とならねばならないのであるが、然るに「自由」は決してかゝる目的となることは出來ない。是れ「自由」は社會的行動の結果として始めて生ずるものにして、決して其の出發點及び終極點を成し得ないからである。眞の自由は物質的及び精神的諸勢力が、社會全體の爲めに有益なる發達をなす事に依て產出されるので、社會的活動が反對の方向に進む時は、眞の自由は常に最とも强く壓迫される結果が、生せざるを得ないのである。而して今日見るが如くに、無意味な形而上學的自由觀念が、社會的組織原理として用ひられねばならぬと考へられて居る以上は、全體の爲めに有益なる物質的及び精神的諸勢力の發達は、決して望まれることが出來ず、又眞の自由は決して實現されないのである。人々が分業の大なる發達の爲めに、個人的に相互に依存することが益々減小し、之れに反して集團現象に依存することが益々增大する今日に於ては、個人的自由に基づく社會組織は、個人に於ける團體の作用を妨害して、個人の孤立を導くであらう。然るに今よく組織されたる社會的體系の明白なる特性と云へば、夫れは諸勢力が分散して居ると云ふことではなくして、社會的に有用なる仕事を逐成する爲めに、諸勢力が强固に相結合して居ると云ふことである。而して只科學的及び產業的體系のみが、右の必然的要求を充たし得るのである。尙ほ此の體系は社會の進化、社會の歷史的發達に深き根柢を有するものにし

て、近き將來に於て必然的に實現さる可きものである。又此の體系は自から社會的自由を產出するので、而して其の自由は個人的自由の如き、只行動の可能性を保證するだけに過ぎないものではなく、眞の社會的幸福を保證するものであるのである。

サン、シモンは右に述べし如く、個人的自由を基礎とする資本主義を排斥したが、併し此處に彼の見解に就て、大に注意す可きものがある。夫れは彼は個人的自由に基づく資本主義を、オーウエンや其の他のユートピアンの如くに、確乎不變なる自然法則に反するものとは考へず、個人を束縛する封建的經濟組織に對して、其の存在權を確立する社會進化の必然的一節或は一階段であると認めたことである。而して此の點に於て、彼はマールクスの先覺者と認めらる可きである。尙は資本主義の概念も、一般にマールクスの發見と見做されて居るが、是れもさきに述べし如く、サン、シモンは彼の廣く產業者と稱するもの、中に、企業家、資本家の利害と勞働者の利害との衝突を觀破した時に、發見したものと云ふことが出來るのである。但し彼は右の利害の衝突を、まだ資本主義に本有的な、必然的なものと考へて居なかつた事は、彼の資本主義の概念の不完全なる點である。

サン、シモンは更に個人的自由に基く資本主義の批判によりて、社會的團結(アソシアシヨン)或は組合の思想を究明して居る。夫れ封建主義は產業によりて破壞されたが、併し夫よりして出現せる社會狀態は、

決して社會理想を實現して居るとは云はれない。個人的自由の要求は、今や其の社會的效果を失ない、勞働者階級は之れに對して全く無關心になつて居る。是れ個人的自由は、プールヂョア階級を大に利益して居るが、勞働者階級を實質的に利益する處がないからである。而して勞働者階級の爲めには、何よりも第一に彼等の生活狀態を改善することが肝要であるが、今夫れは社會的瓦壞に進みつゝある現在の狀態を維持することによりて、決して到達さる可きものでなく、只現在の分裂しつゝある社會的要素の無規律的作用を抑制して、之を一の拘束狀態に導く處の社會的團結或は組合によりてのみ、到達さる可きものである。此の社會的團結或は組合によりて、始めて社會的或は產業的自由が實現されるので、而して其の社會的或は產業的自由と云ふは、つまり仕事或は勞働によりて、一切の社會的階段或は地位に達し得る可能性が、各人に與へられると云ふことに於て成立するのである。「各人は其の出發點が如何にあらうとも、國王の地位を除いての外は、一切の社會的存在の第一位に達し得るであらう、而して各人は只彼の同胞に有益である仕事によりてのみ、其の第一位に達し得るであらう。」

サン、シモンは以上述べし如く、自由主義の根本的原理たる自由の觀念、及び之れに基く資本主義の批判によりて、彼の社會理想の原理たる、社會的自由の觀念及び社會的團結或は組合の觀念を究明したのであるが、更に自由主義の他の根本的一原理たる財產の觀念の批判によりて、彼

の社會理想の他の原理を究明して居る。

夫れサン、シモンによればさきに述べし如く、財産法は根本法である。併し此の法律の社會的重要からして、此の法律に何等の變化をも加ふ可きものでないと、推論してはならぬ。必要なることは、財産關係は法律的に規定されねばならぬと云ふ點にして、決して一定の財産法が永久に維持されると云ふことでない。社會の存在は常に財産權の保持に依存するが、併し早代の文化階段に起源を發する一定の財産法に、常に依存すると云ふのではない。財産法は總ての他の社會現象と同じく、絶へず變化を受け、社會の進歩的發達の事實からして、諸國民は其の社會制度を時代の要求に適合させる權利を與へられて居るのである。然らば財産權は如何に制定さる可きか。財産權は國民の一般的利益の增進に有用なるものであらねばならないので、決して只一社會階級の利益の爲めにのみ制定されてはならぬ。「個人的財産權は、只此の權利の行使の共同的及び一般的利益に於てのみ、基礎附け得られる。而して此の共同的及一般的利益は、時代に從ふて變化し得るのである。」「財産は其の所有者が夫れを、出來るだけ生産的ならしめる可く勵まされる樣に、構成されねばならぬ。」而して工業的財産は今日既に右の主旨に應ずる樣、組織されて居るが、農業的財産はそうでない。されば農業的財産の改造は今日の急務である。農業的財産も工業的財産同樣に、合資會社の形式に從ふて確立さる可きもので、工業者が資本の所有者ではなくし

て、しかも自由に又自己の危險に於て、之を運用すると同樣に、農業者も土地の所有者でなくして、自由に又自己の危險に於て、之を運用す可きものである。要するにサン、シモンは個人的財産或は私有財産を廢止せんとするよりは、寧ろ之を一般に普及させようとしたのである。併し土地及び資本に關しては、又集産主義の方向に進みつゝあつたと云ひ得られる。何れにしても彼は「財産及び財産所有者の尊重」の原則よりは、「生産及び生産者の尊重」の原則の方が、社會に對して遙かに有益、有効であると考へたのである。

却説サン、シモンは自由主義の二原理、即ち近代社會組織の根本原理に就て、以上述べしが如き批判的考察を加へ、又夫れによりて彼の社會理想の根本方針を示したのであるが、今彼が積極的に又包括的に社會理想或は將來の社會組織として樹立したものは、即ちさきにも述べし如く産業的社會或は産業體系の觀念である。

サン、シモンによれば、産業體系或は産業的社會組織は、さきに述べし如く、社會進化の自然的法則に從ひ、今後必然的に實現さる可きものである。而して此の社會體系に於ては、先づ其の根本條件として靈權或は精神權（le pouvoir spirituel）と俗權或は政治權（pouvoir temporel）とが判然區別されて、前者は科學者によりて行使され、後者は産業者によりて行使されること、即ち當代の狀態に於て見るが如くに、政治權が時代後れな無能な貴族や法律家によりて、又精神權が

同様に無能な僧侶や文士によりて、行使されるのでなく、両者共に夫れ〴〵世界史的に其の任務を盡くす可き、堪能なる科學者と産業者とによりて行使されることが必要である。

次に此社會體系に於ては、總ては産業に依て、又産業の爲めに遂成されるであらう。社會は一工場として組織せられ、各成員に夫れぞれ出來るだけ大なる安寧と幸福とを與へるを目的とす可き工業的企業の一種である。物質的利益或は生産は何よりも第一に肝要である。産業者階級は基本階級、社會全體を養ふ階級にして、此階級なくば何れの他の階級も存續しないであらう。

次に此の社會體系に於ては、手の勞働以外の何等の他の生存手段をも有しない社會階級の運命を改善することが、其の主要任務と認められるであらう。人類の歴史的發達を概觀すると、從來人類は二階級に分たれ、其の人數の甚だ僅小なる階級が、國民の大多數を占める階級を支配する爲めに力を盡くし、而して後者は前者に反對せざるを得なくなりて、其の力の大なる部分を、前者に對する鬪爭の爲めに費して居ることを見るのである。然るに此の勢力浪費に拘らず、人類は少なくも文明國に於ては、安寧幸福の大なる一階段に達して居るが、今若し人類が相互に他を壓迫せんとする傾向が止み、之れに反して相合致協力して、一般的幸福の爲めに自然を利用せんと努力するならば、文化は實に驚く可き進歩をなすであらう。而して新しき社會體系、産業體系はまさしく此の驚く可き文化の發達を成熟させる可きものである。此の社會體系に於ては、無産者

は社會的自由の原理に基づき、從來彼等が受け來れる壓迫から解放され、社員或は組合員として取扱はれるであらう。新社會體系は小數者の特別の利益を圖る爲めではなく、多數者の利益の爲めに成立する組合或は團結である可きである。

次に此の社會體系に於ては、一階級が他の階級を支配すると云ふことは、全然廢止さる可きであるが、併し社會的事實の規制は矢張り行なはれる、否な夫れは甚だ肝要であるのである。新社會體系にありては、肝要なるは政治或は統治の形體ではなく、行政能力である。此處では統治體系は廢止されて、行政體系が確立され、人間が人間を支配することが止み、人間が財物を管理することが肝要となる。何等の權利も世襲されない處で、行政の權利は個人の能力に依つて定められ、此くて公共的政策の遂行は最適任者に托されるであらう。而して其最適任者は科學者及び產業者に於て見出されるであらう。要するに新社會體系に於ては、社會の指導經營は智者及び有能者に委任され、結局科學が社會を統率しなければならないのである。

終りに社會が產業的基礎に於て組織されると、相敵對する國民と云ふものは、最早存在し得なくなり、過古の遺物たる戰爭軍隊等は全く消失する。而して一切の歐洲諸國民は相團結して單一なる國民を形成し、其の中に於て各團體は出來るだけ多く生產する爲めに働くであらう。夫れはサン、ピエルやアンリ第四世の夢みたる永久平和である。併し彼等の夢とは根本的に異なつて居

ると云ふのは、夫れは歴史的進行によりて必然的に到達さる可き實證的なものであるからである。而してかゝる歐洲的團結に於ては、歐洲的義務が感ぜられ、歐洲的紐帶が成立し、總ての歐洲國民の苦しめられて居る害惡に對して、歐洲的救濟法が行なはれるであらう。要するに人間愛人道主義は、歐洲に於ける普遍的教説及び國民的生活の原理となり、盲目的な偏狹な愛國心は絶滅されるであらう。

今サン、シモンは右に述べしが如くに、社會理想を立説することにありて、現實主義的、進化史的社會主義の創造者となつたと云ひ得られるので、彼はオウエンやフリエーの如く、只唯理主義的に考へ、小さき共同生活團體の建設を以て、勞働者階級の解放の基本條件となさんとするのではなく、資本主義が社會主義的精神に於て大に發達することを以て、其の基本條件となさんとするのである。而して此の重要なる理論的見地に於て、彼は又マールクスの先覺者であるので、余は是れまでも時々指摘せる如く、マールクスは彼の唯物史觀に於て、又社會主義に於て、サン、シモンから學べる處は甚だ多いので、眞に深くマールクス説を理解せんとするものは、一方に於てはヘーゲル左黨の唯物主義哲學の發達を研究せねばならぬと同時に、又他方に於ては先づサン、シモンの思想を研究せねばならないのである。尚ほサン、シモンは、早代の唯理主義的社會主義者の如く、將來の社會組織の經濟的基礎を、農業に於て求めず、工業に於て求めたこと

は、又近代社會思想の發達上大に注意すべき點である。

却説余が以上述べし處は、サン、シモンの思想を、主として其の實證的現實主義的方面に於て考究したものであるが、併しサン、シモンは夫れによりて直ちに推察されるほど、實證的、現實主義的な思想家では、決してなかつたので、彼は寧ろ本來理想主義的或は空想的ユートピア的な思想家であつたのである。されば以上述べ來りし彼の實證的現實主義的な思想も、彼の著作に於ては大に空想的思想を混じて、或は少なくも空想的な氣分に包まれて說述されて居るのである。

終りに余は、サン、シモンが彼の社會理想を實現せんとする政策的方針の、甚だ興味あると思はれる一方面に就て少しく考察したいと思ふ。サン、シモンはさきに述べし如く、產業が益々發達し、而して政權が產業者の手に歸することによりて、新社會體系が確立されて來るので、此くて社會改造策の根本義は、產業の發達に伴なひ、俗權或は政治權を貴族及び法律家の手から、又靈權或は精神權を僧侶及び文士の手から取り去りて、両者を堪能有爲の人々、卽ち科學者及び產業者の手に委任するに在ると考へたのである。而して彼は產業者階級は企業者、資本家卽ちブールヂョア階級と勞働者階級或はプロレタリア階級とから成立するが、両者の利害は両者共に產業者或は生產者であるが故に、懶惰、無能にしてしかも政權の掌握によりて、產業者の利益を掠奪する貴族階級に對して、相一致して居ると考へた。もつとも彼もさきに述べし如く、後には殊に

英國の狀態に鑑みて、企業者と勞働者との利益の衝突を覺り、資本主義の本有の傾向を觀破したが、しかも結局夫れは企業家が自己の世界史的使命を自覺しないが爲めであると解したと思はれる。此くて彼は一切の束縛から、人類を解放する歴史的使命を帶び、其の實現の機關となるものは、企業家有産者階級であると考へ　又彼等をして此の使命を自覺させることが、最とも肝要な事であると考へたのである。而して彼は時には社會的君主主義、卽ち君主が其の絶對的權力を以て、新しき世界、新社會體系を實現す可きであると云ふ主義を唱へたこともある。されど彼が常に最とも重要視したのは企業家である。彼は企業家が國民の高尙な、賢明な指導者となり、勞働者に信服され、勞働者を統率して以て新社會體系を實現せんことを望み、企業家が「産業の英雄」となり、勞働者階級を一切の階級支配の桎梏から解放する爲めに、沒我的に全力を盡くさんことを熱望したのである。

今サン、シモンの時代に於ける勞働者階級の狀態を顧みると、さきに述べし如く彼等は全く無智、無力の狀態に沈落して居たのであるから、サン、シモンが勞働者階級が夫れ自身に、解放の力を藏有して居ることを觀破し得なかつたのは、敢て怪むに足らぬ。如何に鋭き洞察力を具有する思想家にありても、之を觀破するには、勞働者階級が少なくもマールクスの時代に於て見るが如き程度まで、進歩して居なければならないと思はれる。更に假令サン、シモンの解するが如き

意味にて、ブールヂョア階級が勞働者階級の解放に對して、重大なる意義を有しないとしても、しかも余は勞働者階級の健實なる發達の上に、自覺せる或は人道主義精神の發達せる資本家が是れまでに實際上貢献せる處は決して少々でないと信ずるのである。何れの國民にありても、勞働者階級が健實なる發達をなすには、殊に其の早代にありては、自覺せる或は人道的精神の發達せる企業家、資本家の助力或は協働は、必要なる一條件であると思はれる。されどサン、シモンの考へる如くに勞働者階級、つまりは人類全體の健實な、完全な解放を實現する中心的機關の任務を、企業家階級に望むは、根本的に空想或は妄想であると云はねばならぬ。而してサン、シモンはかゝる空想を抱いて居たことは、彼は資本主義の精神、ブールヂョア階級の心理を、まだ充分によく理解して居なかつた證據であると、察せられるのである。資本主義の精神、ブールヂョア階級の心理を、深く充分に理解すれば、勞働者階級の完全なる解放は、所詮勞働者階級自身の健實なる發達と、熱誠な人道的努力とによるに非らずば、望まれ難きものであることは、明白であると思はれる。而してサン、シモンも最晩年には、勞働者階級の眞實の改善を、企業家の努力に求めることの、甚だ困難なるを覺つて來たと察せられるが、併し其の場合にも、彼は尙ほ勞働者自身の活動に着目することが出來なかつた程、彼の時代の勞働者は無智、無力であつたのである。此くて彼は遂に、彼が是れまで實證主義者として極力排斥し來れる宗教の力に訴へて、企業家、ブ

ールヂョア階級の人道的覺醒を圖らんとしたのであると、余は考へるので、彼が最晩年に「新基督教」(Nouveau christianisme)を唱へた眞意は、其處にあると推察されるのである。此處には最早特にサン、シモンの新基督教に就て述ぶる餘白はないから、又彼の思想の此の方面は、彼の死後、殊に彼の門下生によりて發達したので、次の論文に於てサン、シモン派の社會哲學を論究する場合に、之れに論じ及はそうと思ふから、只簡單に一言するだけに止めるが、要するにサン、シモンは基督教の隣人の愛の教を修正し、而して舊福音の如く禁欲主義や隱遁主義に終ることなく、生の悦びの最高上に導き、又總ての人間の一致和合、及び夫れより生ずる總ての人間の幸福の世界に、現社會を改造せんとする勞働の新福音を說いて、以て企業家をして人類解放の世界史的大使命を遂成せしめんとしたのである。

サン、シモンの社會哲學に就て、以上稍々詳しく論述し來れる處によりて、夫れが大革命後の佛國に於ける社會連帶思想の發達に對し、如何に貢獻する處大なりしかは、明らかに學び得られると思ふが、余は是れより彼の影響を受けて發達せる、コントの社會哲學及び社會連帶思想の考察に移るに先だち、尙ほ少しくサン、シモン派に於ける社會哲學殊に社會連帶思想の發達を、次の論文に於て考究することゝする。(完結)